多賀クロス　サードプレイスがまちの顔

様式11

1．サードプレイスとしての常陸多賀駅

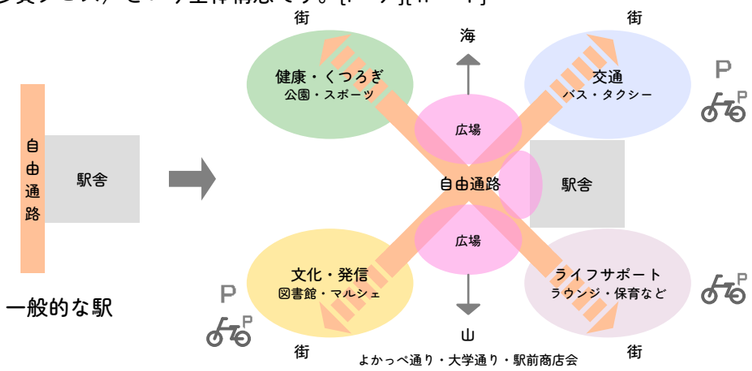
家庭（第1の場）でも学校や職場（第2の場）でもない自分の居場所はサードプレイスとも呼ばれています。そこは**自由な行動**に開かれている居場所です。私たちは、ある場所がサードプレイスとなりえることが**〈にぎわいの芽生え〉**だと考えます。サードプレイスがあることで、人々の幸福感が高まり、さらにその結果として多くの人々が訪れるようになります。商業、経済的な波及、つまり〈にぎわい〉はその結果として追っかけてくるものでしかありません。いままで多くの再開発計画では様々に手を尽くして、その波及結果の部分だけを切り取って真似しようと試み続けて、失敗を重ねてきました。私たちは、〈にぎわいの芽生え〉である**サードプレイスをまずとにかくつくる**ことで、人の充足度、幸せのベースアップをすることを企てます。そうして〈芽生え〉をしっかりと**土地に根付かせる**ことによって**持続的な〈にぎわい〉に育てていく**方法を〈多賀クロス・ビジョン〉として提案します。

2．丘という場、大地という顔

このビジョンの実現のために、私たちは新しい常陸多賀駅を〈丘〉にします。丘は、**場所**でもあり、**ゆるやかな繋がり**でもあります。丘には座る人もいれば、通り過ぎる人もいます。登るだけが目的の人もいれば、そこで何かをすることが目的の人もいます。この計画の中心地は、そんな自由に開かれた大地のような場です。緑豊かな斜面と、そこでくつろぎ自由きままに過ごす**市民の姿**、これが新しい多賀の〈顔〉になります。[Ⅰ―ア]

3．既存と新設をクロスさせる

〈丘〉の頂上であり、線路を跨ぎ東西をつなぐ自由通路〈交差広場〉は、X状の平面となっています。このXという両側に裾広がりの平面形状が、**多方向へのアクセス**を容易にしているだけでなく、**結節点としての場**を生み出し、つなげる以上の機能性を提供します。中心を〈余白〉として開放しつつも、十字状の動線の先に展開する主要な施設や**既存環境と密接な関係性**を築き上げる、その仕組みが〈多賀クロス〉という全体構想です。[Ⅰ―ア][Ⅱ―イ]



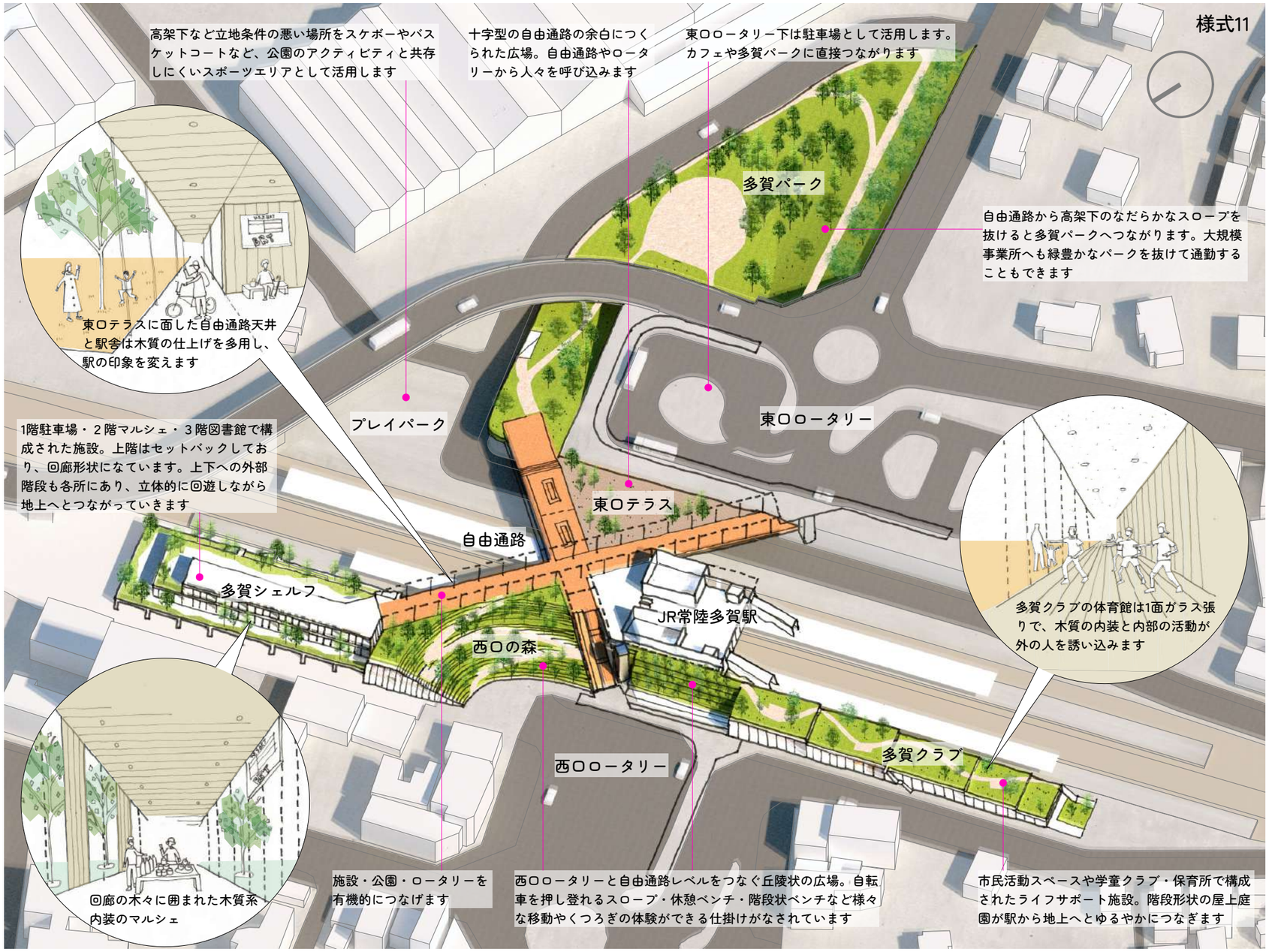
多様な人々をつなげる「多賀クロス」

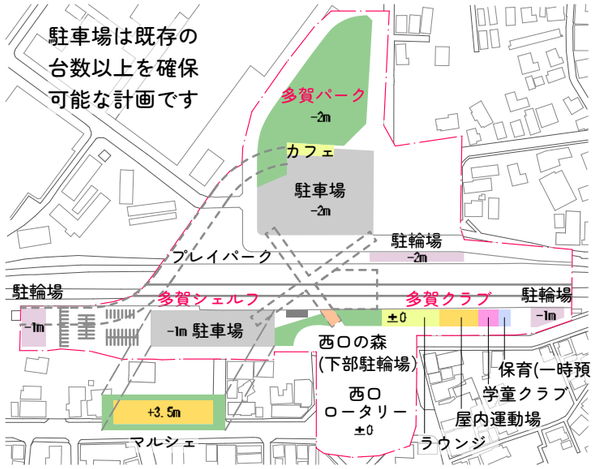
4．帰属意識を生みだす仕組み、帰属意識が生み出す価値

ここでの主役は市民です。市民の自発的な活動が定着することで、市民に帰属意識が生まれるでしょう。その**帰属意識こそがシビックプライド**につながり、そしてシビックプライドは自ずと**地域の価値**を高めます。地域ブランディングを、商品戦略のレベルで行うのではなく、帰属意識の副作用として考えるからこそ、**持続的で多角的な価値**を生み出すことができると考えます。ここが、その自由と自発的な活動のホームベースとなります。

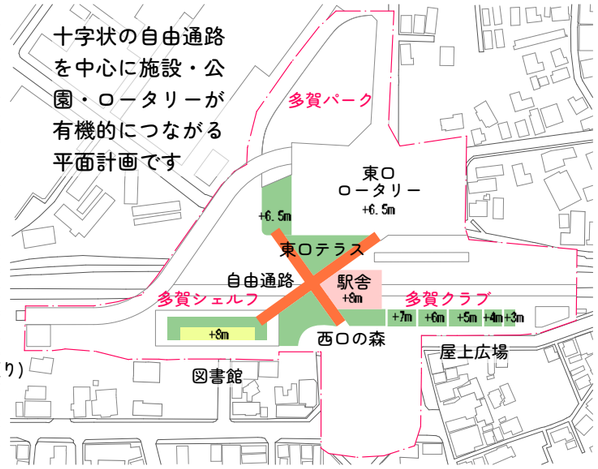
5．緑豊かな余白空間

ここは森のようにこんもり緑豊かな植栽があり、開放的な屋根架構や天井の高い内部空間は**木質材料を多用**した、やさしく包み込むような場となります[Ⅰ―ウ]。それは交通インフラに従来求められてきたスピードと合理性とは対局にあるような設えに敢えてすることで、多用な人々を受け入れる**〈余白〉を浮かび上がらせる**ことでもあります。[Ⅰ―ア]



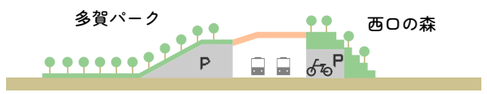


西口ロータリーレベル　キープラン



自由通路レベル　キープラン

駅東西は多賀パークからスロープや西口の森でゆるやかにつながります



東西断面ダイアグラム

西口の南北は各施設によってゆるやかに地上につながります

南北断面ダイアグラム

西口の森と〈余白〉と自分事

1．持ちつ持たれつ

〈多賀クロス〉は、周辺街並みや商店会と〈持ちつ持たれつ〉の関係性を築きます。街が提供できる機能（商業等）は**街に任せ**、〈多賀クロス〉はその隙間を埋め、また繋ぎの触媒の役目を果たします。[Ⅱ ーイ][Ⅱ ーウ]

2．フレキシブルな建築

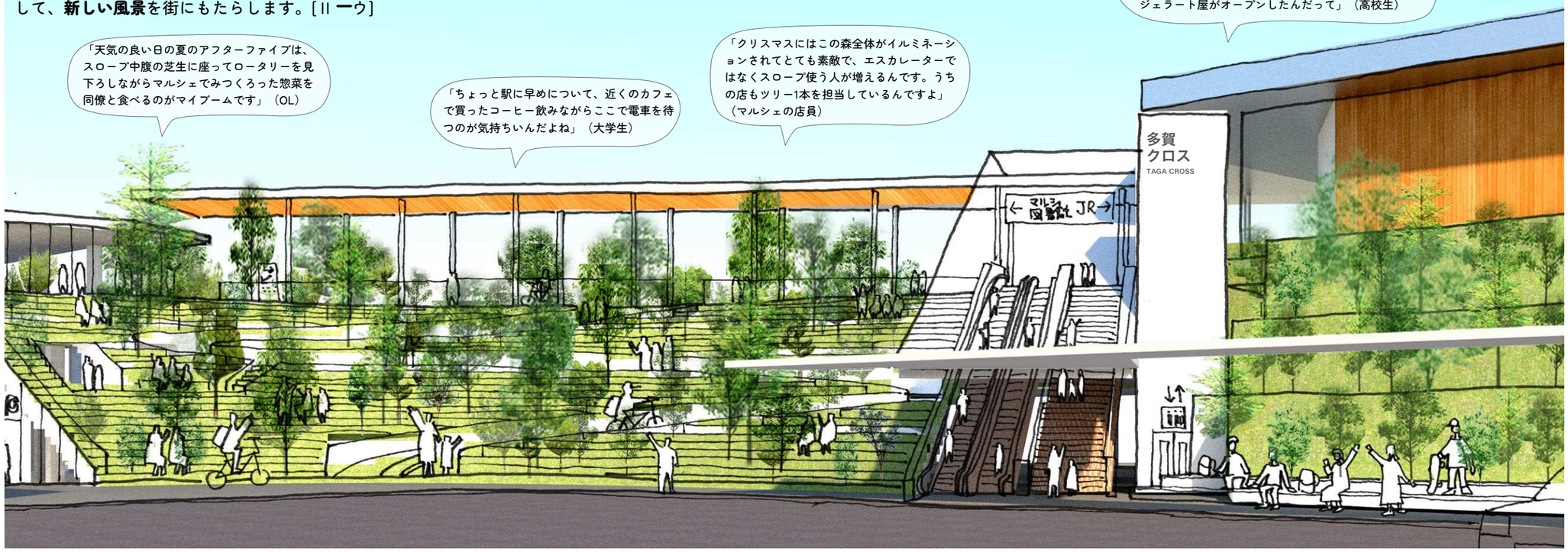
多賀クロス内で提供する施設は、市民の主体的な活動と、ライフサポートの機能を中心的に配置しています。それらは民間が提供しない、できない施設（収益性のない空間、大きな空間が必要な機能）や、駅直結であることに意義があるものを考慮します。適切な用途機能はそれぞれの**時代の要請で変わって**くるものであるため建築は用途変更がしやすいシンプルなつくりとしています。また、建物の高さは、周辺と同じか低い程度に押さえ、**周辺環境と一体の街並み**を形成するよう配慮しています。[Ⅱ ーア]

3．余白こそ中心

これら全ての施設を開放的で入りやすいつくりとするだけでなく、きまった使い方のない〈**なんでもない場所**〉〈余白〉を多数用意し、全ての市民に（目的のある人だけでなく**目的のない人たちにも**）気楽に使って使い倒してもらえる場所づくりをします。[Ⅱ ーア]

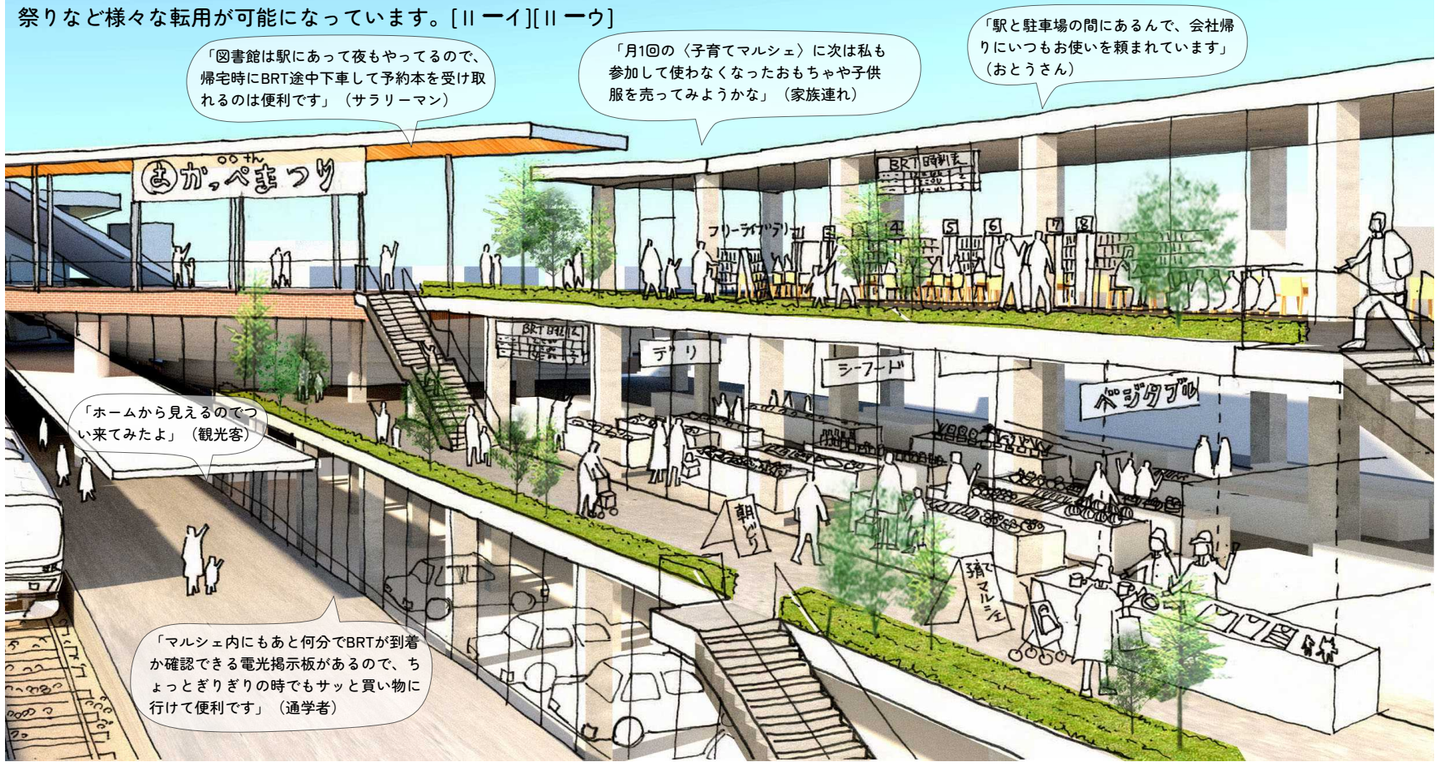
西口の森～ゆっくり楽しみながら散策できるまちの顔～

西口ロータリー前には**駅の新たな顔**となるおおらかな丘陵〈西口の森〉が出現します。樹々と草花の間には、ゆっくり登れる遊歩道、ベンチの他、座ったり寝転んだりできる段差や傾斜の居場所が至るところに配置されています。市民の憩いの場として、待ち合わせスポットとして、観光名所として、**新しい風景**を街にもたらします。[Ⅱ ーウ]



多賀シェルフ～ひな壇緑地のオープンシェルフ～

〈多賀シェルフ〉最上階のサテライト図書館カフェでは、本の予約貸出、閲覧サービス以外にも、自習、読み聞かせ、編み物、待ち合わせ、など様々な**自主的な持ち込み活動**をサポートします。2階の道の駅スタイルの特産物直売所は、地元生産者が持ち込む新鮮な農畜産物、米の他、パン、惣菜などの加工品やクラフトなどの多分野を揃えた**作り手の顔が見える売り場**です。1階は天井の高い開放的な駐車場となっており、お祭りなど様々な転用が可能になっています。[Ⅱ ーイ][Ⅱ ーウ]

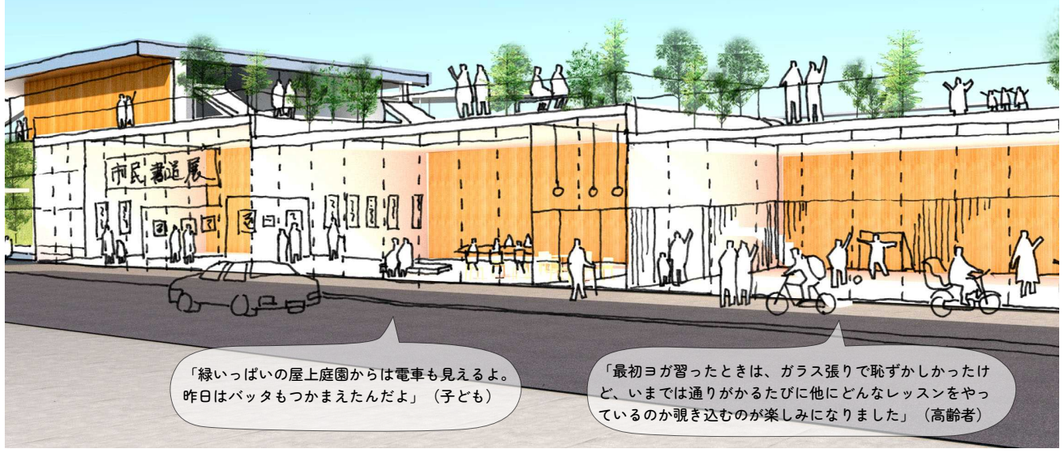


4．ヒエラルキーのあるサイン・照明で分かりやすく豊かに

昼夜、平日休日、天候、季節問わず**あらゆるシチュエーション**で様々な人たちに安全安心、快適に利用してもらうために、明瞭で安全な動線計画、サイン計画と照明計画を行います。**照度にグラデーション**を与え様々な利用ニーズとムードに応えられるようにします。発車時刻電光掲示板を数多く設置することで、いろいろな場所で発車を待つことができるよう配慮します。動線計画は、バリアフリーを確保した上で全ての人が可能なかぎり同じルートで回遊できるよう配慮します。また自転車でも東西の往来を可能とし利便性を高めます。駐輪場および駐車場は駅に近接して最大限確保する計画とし、転用が可能な構造とします。太陽光パネルを導入し、CO_2排出削減および非常時等に配慮します。[Ⅰーウ][Ⅱ ーア]

多賀クラブ～駅前クラブ活動で健康促進～

〈多賀クラブ〉は、屋上緑化された平屋の、主に市民のライフサポートに資する建物です。駅前だからこそ**小体育館**をつくることで、いままで以上の広い**全世代市民**を対象に健康促進をサポートします。また保育所や学童を駅につくることで働く世代の生活の利便性を高めます。[Ⅱ ーイ][Ⅱ ーウ]



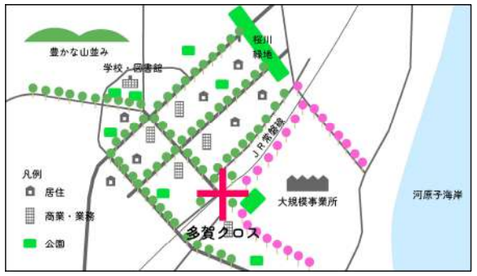
鳥のさえずりとパンポンとスタートアップ

1．3本の柱

〈多賀クロス〉は、きままな**無料ゾーン**、活動に巻き込まれたくなる市民のスペースなどを通してサードプレイスをつくることを主眼としています。サードプレイスに、エコリンクとウエルビーイングという２つのレイヤーを重ね合わせることで、全体を**多様性豊かで持続的な場**としてつくりあげていきます。[Ⅲ ーイ]

2．エコリンク

〈多賀クロス〉は緑にあふれています。それは観賞用、日陰用という人間視点での使い方だけではなく、より大きな**生態系**の視点で連続性を生み出すものとして考えます。植物が連なることで、多様な生物たちが生息するエコリンクとなります。そこでは**虫や鳥のさえずり**が季節を知らせてくれます。駅という元来リンク機能（人間とモノ）の場を生態系のリンクをも含めて拡張し、あたらしい駅の在り方を提示します。[Ⅲ ーイ]



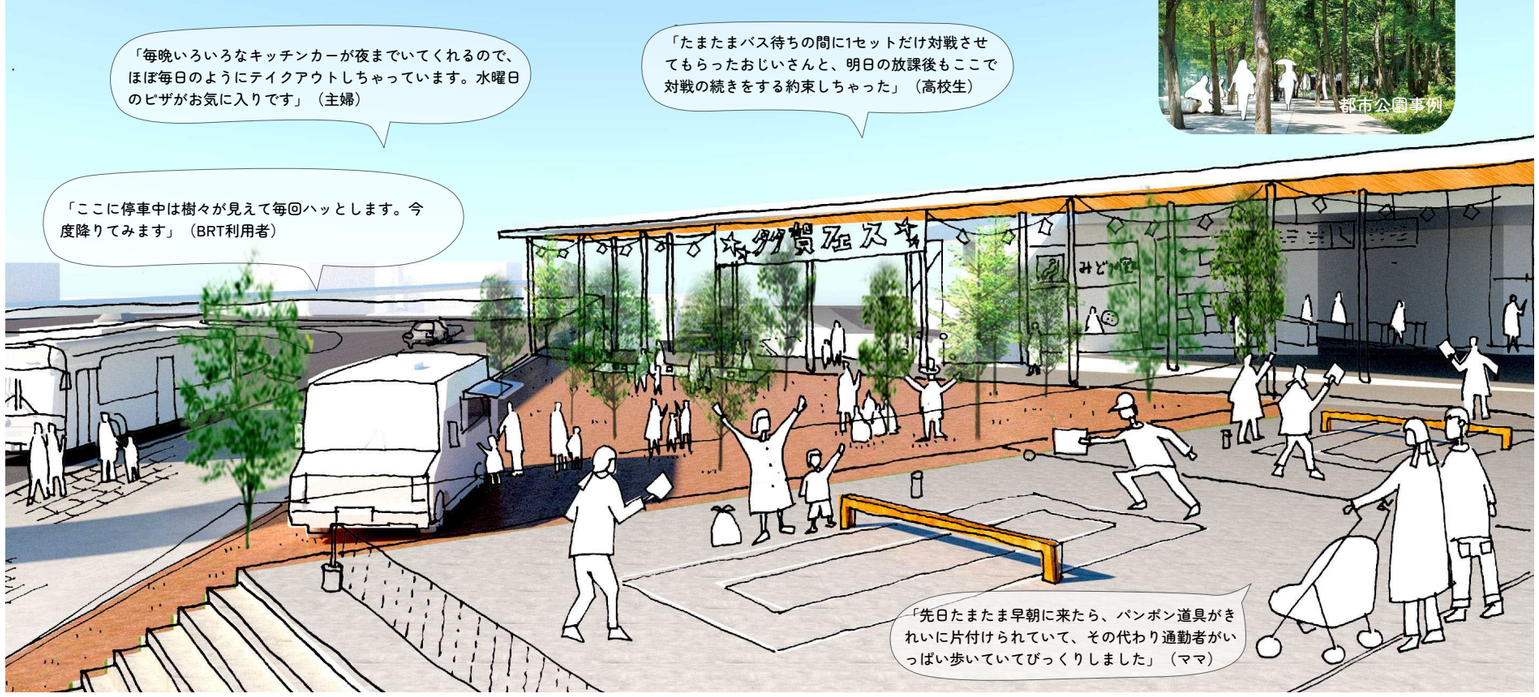
多賀クロスを中心としたエコリンクのイメージ

3．ウエルビーイング

〈多賀クロス〉は、**市民の幸せ**を増大させることが最終的な目的ですが、市民の健康は幸せのベースとなる最重要の事柄です。〈多賀クロス〉は人々が集まる場所であるからこそ、直接的に健康促進に関わる義務があると考えます。より具体的には、パンポン、スケボ、体育館などの自主的な運動をサポートする**室内外の運動施設**、ヨガやダンス、合唱など個人でもコース形式で参加できる活動ができる多目的ルーム、〈多賀クロス〉全体ににちりばめられている**全世代健康器具**などなどを備えています。それだけでなく、通勤通学でこの駅を経由するだけでも緑に触れることができ、**精神的な健康**を促します。そして、ここでに集まってくる人と人との出会いが、あるいは人々の想いを感じることが、心身のウエルビーイングを正のスパイラルへと導くと考えています。[Ⅲ ーイ]

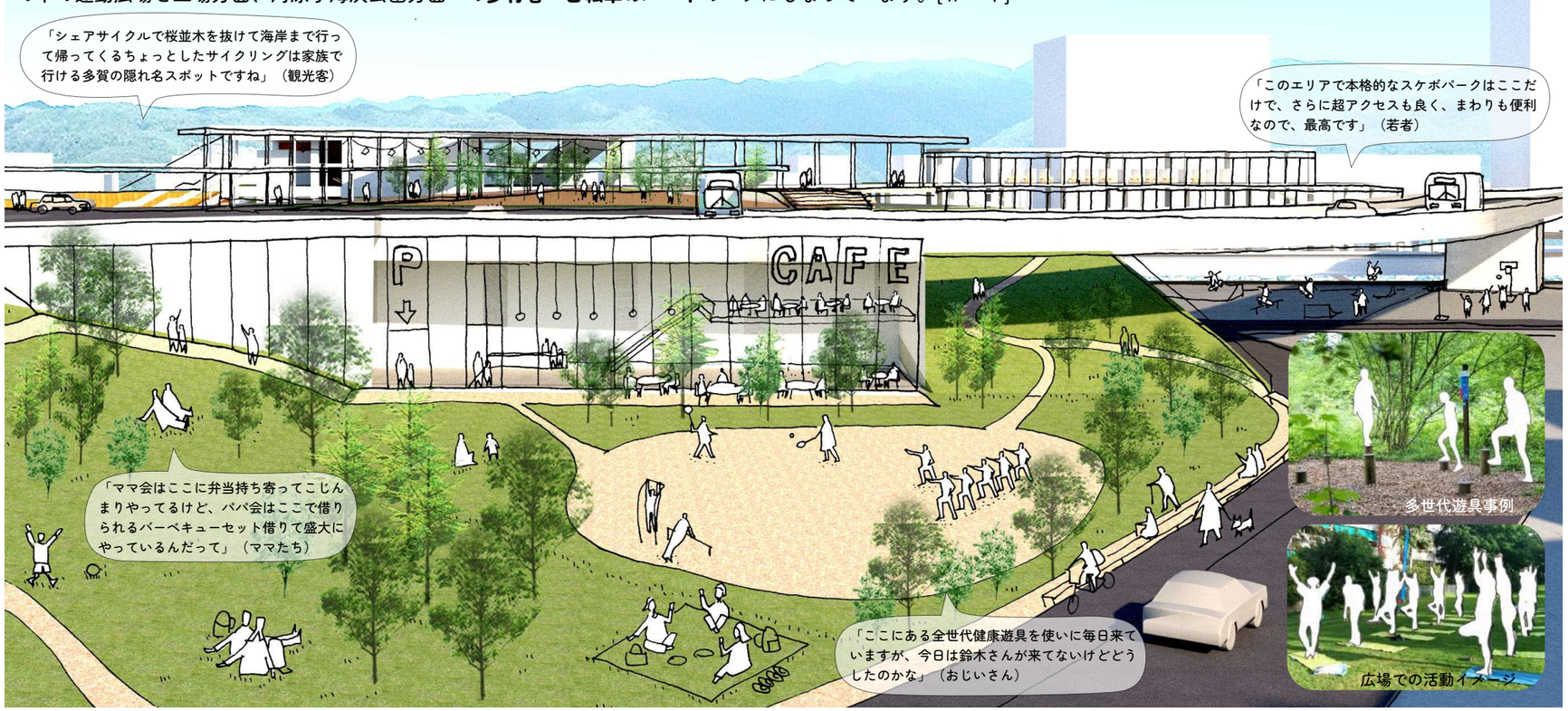
東口テラス～東口の顔とパンポン～

東口BRTロータリー前の〈東口テラス〉は、樹々の植えられた多目的都市公園で、**車の乗り入れが可能**なゆえに幅広い可能性に開かれています。その脇の〈多賀パーク口〉の自由通路は、通勤ラッシュ時以外は、最低限の通路を確保して残りは**パンポンコート2面分のスペース**として市民活動に開放されます。[Ⅱ ーイ]



多賀パーク～緑のネットワークの玄関口～

〈多賀パーク〉は、類をみない**駅直結の広い公園緑地**として新しい使われ方に開かれた場です。BRT高架の下をくぐるゆるやかな斜面で駅と直結しているため、三角広場〈東口テラス〉と一体化したイベント等も可能です。またBRT高架の下の運動広場と工場方面、河原子海浜公園方面への**歩行者・自転車のルート**のハブにもなっています。[Ⅱ ーイ]



4．市民とともに夢を描く

〈多賀クロス〉は、市民がユーザーであるだけでなく、市民が運営者でもあるような場所です。こういう場の計画には、**市民とともに計画**していく方法でなければいけません。すでに活発な活動をしているまちづくりプレイヤーたちに加え、まちづくり人材育成の枠組み等を活用して**多賀クロス計画市民代表委員会**等を設置し、継続的に計画に関わってもらう必要があります。[Ⅲ ーア]

5．市民とともに学ぶ

先進的な取り組み事例をリアリティをもって知ることが大事です。また、現状の多賀の街並みがどうなっているのか、指標からではなく、実際のアイレベルで認識することも不可欠です。そのために、**合同街歩き会**や、まちづくり事例の**レクチャーシリーズ**などを企画し、市民らと共に学びながら進めていくプロセスが必要です。[Ⅲ ーア]

6．チェンジマネジメントを導入

自由な〈余白〉空間は、新しいタイプの空間です。その可能性を最大限に引き出してもらうには、利用者に任せると同時に、何かしらの手助けも必要です。〈他人の使い方を見る→気づきがある→さらに広がる→〉という正のスパイラルが定着するまでの助走期間には、**ナッジやトリガーのような仕組み**を注意深く配置することが特に重要になります。このチェンジマネジメントを実際に行う人材にも**設計段階から密に**関わってもらう必要があると考えます。[Ⅲ ーア]

7．市民が結束して指定管理者になれる？

サードプレイスからアーバンコモンズへと展開していく〈多賀クロス〉は、狭義の計画施設内だけでなく、広く**周辺の街並み、商店会との連携**が必要になります。〈持ちつ持たれつ〉ウインウインの関係となるためには、広域エリアでのマネジメントが最重要となります。**計画の早い段階から**その**指定管理者と連携する**ことが成功に必須と考えます。また市民委員会からのスピンオフで起業し指定管理者として立候補できる道筋も整備する必要があると考えます。[Ⅲ ーア]